

# 世間の目線にたつた布教

(日蓮宗現代宗教研究所研究員)

宇都宮 恵禎

まず、このテーマが問われること自体、私たち僧侶は世間の目線を外しているのだということを認識しなければならぬ。

世間の目線にたつという事は、一つに、私たち僧侶が世間からどのように見られているかをきちんと把握することにある。

私たち僧侶が布教教化する対象は、檀信徒が主である。しかし、檀信徒という枠組みのそとにいる多くの世間の目を、どのくらい意識したことがあるだろうか。

事例) 「七面山で出会った若い女性」

登詣者としては珍しい、スカートにパンプスという格好のその女性は、たまたま近くを通りかかったので、登ってみようかと思っただけ。宗教には全く関心がないという。女性で剃髪にしている私の姿を不思議そうにみながらも、笑顔で話してくれた。

しかし、次の瞬間彼女の笑顔はひきつった。その日は、偶然にも特別信行道場の七面山登詣にあたっていた。白衣姿に団扇太鼓をたたき、お題目を唱え登り迫ってくる集団は、彼女の目にどのように映ったのであろうか。その口から漏らした一言は、「気持ち悪い……」であった。拒否してしまった彼女は、何をいつても耳を貸してくれなかった。そして、足を滑らしながら逃げるように登っていく姿を見つめるしかなかった。休憩所の片隅で

道場生を見つめながら、下山するといつて別れた。

一時期、世間を騒がせたオウム真理教、パナウエーブ等の影響であろうか、白装束に異様さを感じたらしい。お題目を唱えるその姿に、信念を感じ取るのではなく、目に見えないものに陶醉する異様な風景にしか映らなかったことに、私自身が大きな衝撃と世間の側面を見せつけられた。

宗教アレルギーが、現代人の潜在意識に深く浸透して久しい。私たち僧侶が行く所は、葬儀にしても一様に受け入れ態勢が整っていることがほとんどである。多くの僧侶は、世間の冷ややかな眼差しにあまり苦痛を感じていないのが実情ではなからうか。

それでは、檀信徒の枠の外にいる世間の人々に交わり訴えかける機会はどうにして得られるか。電車の中で隣り合わせた人との会話、店で食事をしていて知り合いになるなど、きっかけは寺という場だけではないのは確かである。ただ、私たちは、どれだけその機会をえられるだろうか。そして、どれだけ僧侶が自分の目でその現実をみようとするだろうか。

事例) 「宗教色を出さないお話をお願いします」

ホテルで行われた集まりで話をする機会を得たのだが、条件付であった。「色々なかたがしらっしゃるので、宗教色を出さないお話をお願いします」と依頼された。ただ、僧形で臨めた。

檀信徒の多くが「もつと、法を説いてくれ」「もつと、説教の機会を得たい」と望む反面、上記のような場合に対処できる話の内容を常日頃から考えておく努力も必要である。

宗教アレルギーになってしまっても、自己啓発への関心は年々高まっている。その本の内容は、とても読みやすくなっている。教学用語をどれだけくずしてよいのか難しいところであるが、もつと分かり易く、現代語に置き換えられるような説明のしかたを模索していかなければならないのではなからうか。

残念なことに、多くの人々に読まれる本にはこのような一文もある。

世間は「寺」をどのようにみているのか。

商売化した寺院運営：布施をしているというより、料金を払う感覚

生活基盤が安定した上に立つ寺院活動：言っている事とやっている事が違う

物質文明に共に押し流された我々がこれから歩む道

人口減少：日本だけでなく、世界事情も変わる

本物志向：サービス業ではない

これから様変わりする現代、そして未来に、確かなものを伝えていける基盤が整っているのであろうか。僧侶へは、「このようにあってほしい」という期待がある。クレームが付いている今のうちに、信頼回復の手立てをすべきである。

「目線にたつ」ということは、目線そのものを上げたり、下げたりすることではない。私たち僧侶が当たり前と思

いながら見過ごしていることは、世間の人々にとっては非日常であるということが多く、その格差を今一度、しっかりと受け止めなければならぬ。世間に合わせるのではなく、世情を知ること、そして、わたしたち僧侶が見つめる真実まで引き寄せ、訴え続ける使命があることを忘れてはならない。